

水木しげる氏

表紙絵

=ノリノリでネズミダンス=

表紙絵：水木しげる

- | | | |
|---------------------------|-------|-----|
| ・ 特集：深大寺分館開館50周年／10周年 | | 2 |
| ・ 特集：神代分館は開館50周年 | | 3 |
| ・ 秋の夜長とミステリ | | 4～6 |
| ・ ぶちさんコーナーへようこそ！ | | 7 |
| ・ オンライン営業中！？このほんよんで！レストラン | | 7 |
| ・ 郷土の歴史と伝承 | | 8 |

祝 深大寺分館開館50周年 / 10周年

深大寺分館は、1971年7月24日に調布市内で3番目の分館として開館しました。
また2011年5月28日には、現在の場所に移転し、リニューアルオープンいたしました。
それから50周年、10周年と節目の年を迎えた深大寺分館をご紹介します。



【旧深大寺分館について】

開館当初は一般書が 3,832 冊、児童書が 1,990 冊の蔵書でスタートしました。当時の開館時間は午後1時から5時まで、貸出冊数も1人1冊で、現在より短い開館時間・少ない冊数でしたが、初日には235冊の貸出があったようです。(2011年6月25日発行「図書館だより 第220号」より)

開館前、この地区には子ども文庫を中心とした、市民の方々のグループ読書活動が活発に行われていました。開館時にはその活動に関連して、読んだ本をテーマに子どもたちが描いた絵が、壁面をいっぱいにしたそうです。

初日には子どもたちの長い列ができ、開館を楽しみにしてくださっていた様子がうかがえます。また、開館直後に発行された「調布市立図書館報第23号」では、入口で1冊ずつ本を手にした笑顔の子どもたちが表紙を飾っています。



開館当初の外観



カウンターと子ども室の様子

貸出は機械ではなく、カードで管理していました。

【周年記念イベントを実施しました】

5月21日から7月25日まで、周年記念イベントとしてゲームブックの配布と写真の展示を行いました。併せて、皆様からいただいた、素敵なイラストやお祝いのメッセージも展示しました。お寄せくださった方々、本当にありがとうございました。一部をご紹介します。

おめでとう
えほんいつもかしてくれてありがとう

10周年おめでとうございます。
リニューアルした年に生まれた子供も
今年10歳になりました。
これからもお世話になります！

おたんじょうびおめでとう!!
いつも本をたくさんよんでいます。
夏休みには207さつきました。



展示の様子

花壇に咲く花がメッセージカードとなっています。

地域の図書館として、皆様に親しんでいただけるようこれからも成長してまいります。
深大寺分館をどうぞよろしくお願いいたします。

1971年

神代分館は1971年10月1日（金）、市内4番目の分館として開館しました。

雨だったにも関わらず、「都民の日」で学校がお休みだった子どもたちが開館を待ちわびてたくさん並んでいましたそうです。

開館当時は午後1時から5時までの開館、1人1冊の貸出でした。



👉 開館直後、にぎわう子ども室

【開館初日の神代分館】

蔵書数：3,817冊

入館者数：45人

貸出冊数：165冊

神代分館



今後ともよろしく
お願いします！

開館50周年

今では1日に少ない日でも200冊、多い日には900冊以上貸出ししています。

蔵書数は12倍になりました。

コロナ禍で迎える50周年となりましたが、今後とも地域の身近な図書館として努めてまいりますので、どうぞよろしく願いいたします。



👉 現在の子ども室

本も書架も増え、ずいぶん雰囲気が変わりましたが、窓のあたりに開館当初の面影が感じられます。

【2021年8月1日（日）の神代分館】

蔵書数：45,827冊

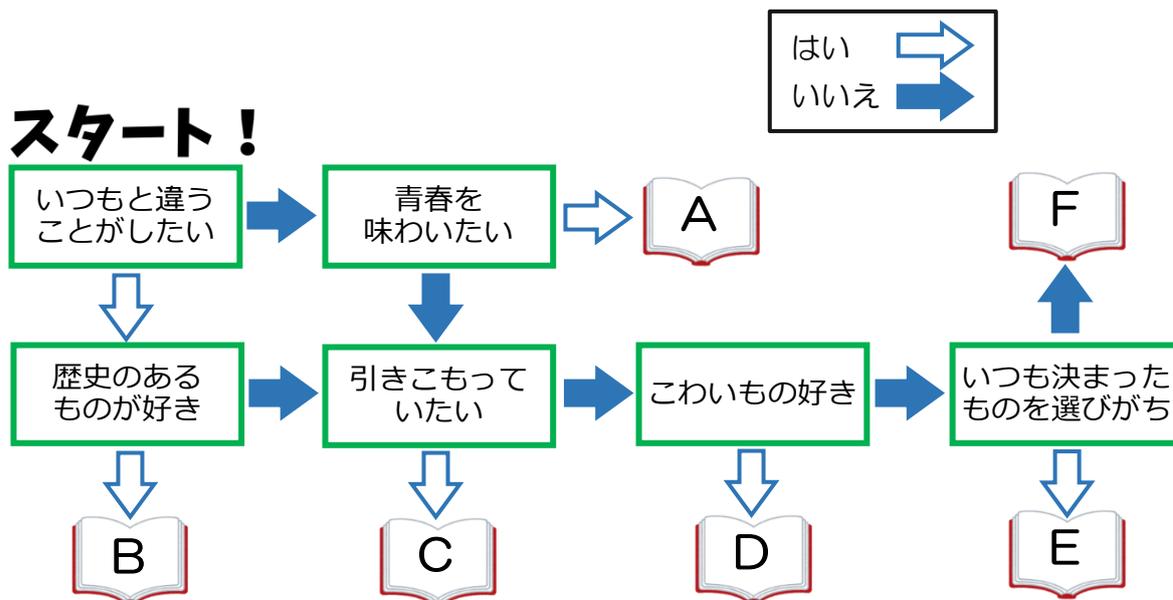
貸出者数：313人

貸出冊数：865冊

2021年

秋の夜長とミステリ

夜が長くなる季節。今夜のおともにミステリ小説はいかがですか？
 おすすめのミステリがわかるチャートと、図書館員のレビューをご用意しました。
 お気に入りの一冊が見つかりますように。



A 青春ミステリ

学園ものや恋愛ものなど、青春の中にある人物たちを描いたミステリ。
 『雪が白いとき、かつそのときに限り』陸秋槎著
 『切れない糸』坂木司著
 『氷菓』米澤穂信著 など

B 古典ミステリ

長く読み継がれてきた名作たち。
 『幽霊塔』江戸川乱歩著
 『月長石』ウィルキー・コリンズ著
 『シャーロック・ホームズの冒険』コナン・ドイル著
 『三つの棺』ジョン・ディクソン・カー著 など

C クローズドサークル

嵐の山荘や絶海の孤島など、外界から隔てられた空間で起きる事件を扱う。
 『十角館の殺人』綾辻行人著
 『星降り山荘の殺人』倉知淳著
 『斜め屋敷の犯罪』島田荘司著 など

D ホラーミステリ

ホラー要素が強いミステリ。
 『11/22/63』スティーヴン・キング著
 『アニーはどこにいった』C・J・チューダー著
 『半身』サラ・ウォーターズ著
 『狐火の辻』竹本健治著 など

E シリーズもの

1冊じゃものたりない！長く楽しめるシリーズもののミステリ。
 『心霊探偵八雲』神永学著
 『容疑者Xの献身』東野圭吾著
 『比類なきジューヴス』P.G.ウッドハウス著 など

F 短編集

少ないページ数だからこそそのロジックが冴える！短編ミステリ。
 『叫びと祈り』梓崎優著
 『メルカトルと美袋のための殺人』麻耶雄嵩著
 『真っ白な嘘』フレドリック・ブラウン著 など

★ 図書館職員のおすすめミステリ ★

『雪が白いとき、かつそのときに限り』 陸秋槎著

冬の学生寮で、女子高生の死体が発見された。雪上に犯人の足跡はなく、自殺として処理される。5年後、生徒会長の馮露葵は、司書の姚漱寒とともに事件を調査するが…。今アツい華文ミステリ。著者は日本の新本格ミステリの熱烈なファンで、影響が色濃く伺えます。青春のほろ苦さ、女子高生ならではの心の機微や関係性など、人間ドラマも見どころ。同著者の『文学少女対数学少女』もぜひ。

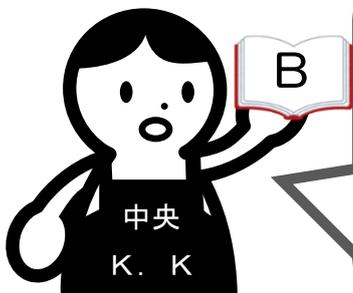
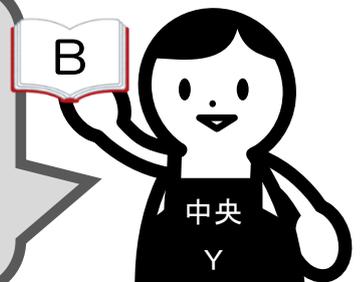


『切れない糸』 坂木司著

父親が急逝し、家業のクリーニング店を継ぐことになった和也は、お客さんとのやりとりや衣類の中に謎を見つけます。謎を解決するのは友人の沢田。彼の助けを借りて謎を解くことで、和也自身も成長していきます。商店街ならではの人情味のある頼もしい大人たちが、ひよっこの和也を支えてくれるのも好きなどころです。坂木作品は世界が繋がっているの、他の作品に登場する人や場所探しをしてみるのも楽しくておすすめです。

『月長石』 ウィルキー・コリンズ著

詩人のT. S. エリオットが「最初の、最大にして最良の推理小説」と評した、推理小説黎明期の作品です。150年以上前に書かれた小説ですが、登場人物の個性が生き生きと表現されていて、古さを感じず楽しく読めます。最初は分厚いのでびっくりしましたが、読み始めると面白く、一気に読みました。なかなか外に出られない今、じっくり腰を据えて読みたい方におすすめ。もし気に入ったら、同じ著者の『白衣の女』も読んでみてください。

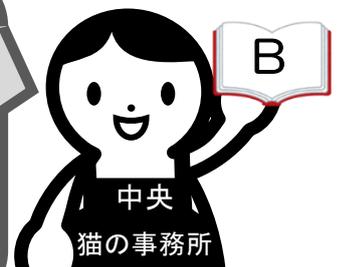


『シャーロック・ホームズの冒険』 コナン・ドイル著

世界で最も有名な人物であるシャーロック・ホームズ。「冒険」に限らず、シリーズ全編が珠玉のミステリ集です。翻訳はいくつかありますが、個人的には延原謙氏のもの（新潮文庫）が、やや古風な文体ながらも、時代の雰囲気味わえるのでおすすめです。8月からNHK-BSでテレビシリーズ（主演：ジェレミー・ブレット）も放映されています。こちらも、ホームズ物映像の最高傑作として何度も繰り返して放映されている定評あるものです。小説ともども楽しめます。

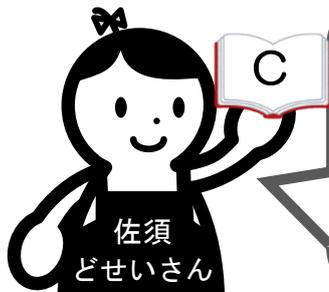
『幽霊塔』 江戸川乱歩著

長崎の片田舎、時計塔のある屋敷を舞台にしたミステリ小説です。この屋敷は、建てた大富豪が完成と同時に行方不明になったという日く付きの物件。以来「幽霊塔」と言われています。さらに金銀財宝が眠っているという噂も。長い間売りに出ていたこの屋敷を、全く幽霊など信じない主人公の叔父が買い取ったことから、物語が動き始めます。「あと数ページで終わるけどどうなの?!」と、最後まで先の見えない展開で、一気に読んでしまいました。



『十角館の殺人』 綾辻行人著

大学のミステリ研究会の7人が訪れたのは、絶海の孤島に佇む館。十角形の形をしたその奇妙な館で、メンバーの1人が何者かに殺されてしまいます。視点は島と本土を行き来しながら真相に近づいていきますが、終盤の「ある台詞」を読んだ時の衝撃は未だに忘れられません。できることなら記憶をなくしてもう一度読みたい1冊です。本著は奇想天外な館が舞台の「館シリーズ」1作目です。2作目「水車館の殺人」以降も面白いですよ！



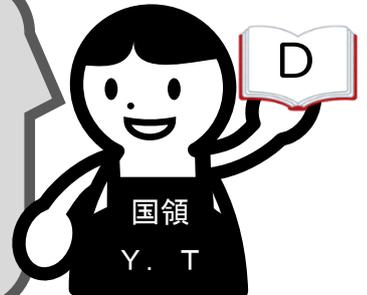
『星降り山荘の殺人』 倉知淳著

『日曜の夜は出たくない』の猫丸先輩シリーズなど「日常の謎(※1)」でも知られる著者ですが、こちらは吹雪の山荘、連続殺人、読者への挑戦状(※2)と、王道のクローズドサークルものです。キザな男前タレント、熱血漢のマネージャーなど個性豊かな登場人物、緻密なロジックと驚愕の謎解き。まずは事前情報なしで読んでほしい！そんな1冊。 ※1:日常のふとした謎を扱うミステリ ※2:著者からの「謎は解けるかな？」という挑戦状

『11/22/63』 スティーヴン・キング著

この著者の様々な小説を読んでいるときにこの本に出会いました。この本は、主人公のジェイクが、あるきっかけで過去に通じる穴を見つけるところから始まります。そして、その穴の先でケネディ大統領の暗殺阻止を計画する…という壮大な物語です。

大部な本ですが、1960年くらいのアメリカの情景が目に浮かび、どんどん読み進められます。ミステリ、SFなどいくつかのジャンルが含まれながらも、結末の充実感は必見です。

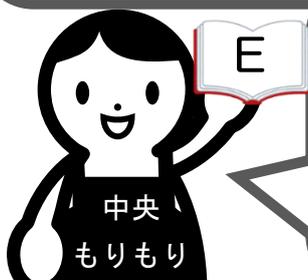


『アニーはどこにいった』 C・J・チューダー著

「息子じゃない」。息子を惨殺した女性は血文字でそう書き残し自殺した。25年前、主人公の妹アニーの身に起きた忌まわしい出来事との関係は？故郷に呼び戻された主人公は得体のしれない悪意と恐怖に対峙する…。怖さと不気味さと気持ち悪さにぞわぞわしながらもページを繰る手が止まりません。

『心霊探偵八雲』 神永学著

主人公の斎藤八雲は、不思議な赤い瞳を持つ大学生。死者の魂を見ることができる彼が、幽霊がらみの事件を解決していきます。高校生の時、ミステリが苦手だった私に、友人がすすめてくれました。無気力でいけ好かない青年だった八雲が、最初の依頼人・晴香と、だんだんと良き相棒になっていく様子が大好きです。謎解きとホラーと、時々恋愛と…。複数の意味でドキドキしながら読みました。



『容疑者Xの献身』 東野圭吾著

福山雅治目当てでドラマ「ガリレオシリーズ」を観ていた。映画化すると知り、予習として読んだ本。ある親子が殺人を犯し、隣人で数学教師の石神が共犯を申し出るところから物語がはじまる。事件はすでに解決しているように見えるが、石神と湯川教授の腹の探り合いに最後の最後までどきどきする。そして、湯川教授がすべての謎を解き明かしたとき、タイトルの意味がわかり涙する。

『叫びと祈り』 梓崎優著

緊急事態宣言発令による自粛期間中、旅行に行きたい気持ちを抑え、せめて読書だけでもと思い、世界各国を舞台にした作品を読んでみました。それぞれの国の文化とミステリが見事に融合していて、異国情緒漂う独特のスリル感が味わえます。短編なのでスキマ時間に読めるのも嬉しいところ。読書の秋にぜひどうぞ！



『メルカトルと美袋のための殺人』 麻耶雄嵩著

本格ミステリのルネッサンスともいえるべき「新本格ムーブメント」の只中にデビューした著者。緻密で論理的な謎解き、それを横からはっ倒すかの如き結末、奇抜な探偵など、後進の清涼院流水らに大きな影響を与えました。本書の探偵・メルカトル鮎(メル)はとても嫌なヤツ。しかし奇妙な魅力があり、謎解きの面白さも相まってつい読んでしまいます。メルが活躍する最新作『メルカトル悪人狩り』も刊行されたばかりです。

ぶちさんコーナーへようこそ！

ぶちさんコーナーでは、中高生のみなさん向けに、テーマを決めて本を展示したり、市内のイベント情報をお知らせしています。国領分館、深大寺分館、佐須分館にあります。

思ったことやイラストなど、自由に書いて投稿できる「ぶちさんポスト」もあります。投稿は館内に掲示され、図書館を利用する方に見てもらうことができます。中高生だけでなく、様々な世代の方々に楽しんでいただけるコーナーを目指しています！



深大寺分館



佐須分館



国領分館



マスコットキャラクターの「ぶちさん」。読書とおしゃべり、魚が好き。流行に敏感で、桜色の鼻がチャームポイントです。

オンライン営業中!?

このほんよんで!レストラン



調布市立図書館では絵本リスト『このほんよんで! 第2版』を発行しています。子どもたちにぜひ読んでもらいたいと思う本や、長い間、読み継がれてきた本を選んで紹介しています。

図書館ホームページでは、収録作品404点の中から、おいしい食べ物が登場する絵本を紹介するコンテンツを公開しています。



トップページのお知らせ一覧、もしくは右上の二次元バーコードを読み込んで、ぜひ遊んでみてください。

ご注文
お待ちしております！



鍛冶屋の職人

関 口 宣 明

1. 村のくらしと鍛冶屋

農村のくらしには、田畑をたがやす鍬や、薪を割る鉈、調理用の包丁などの鉄製品が欠かせませんでした。

これらの道具を作り販売していたのが「野鍛冶」とよばれる鍛冶屋です。明治時代末から大正時代初めにかけて、甲州街道沿いの宿場町（旧調布町）に4軒、旧神代村に3軒ありました。

当時、東京市内へ野菜などを運ぶための荷車が増え、車輪にはめる鉄の輪っかを作る仕事で忙しかったといえます。朝から晩まで職人さんが「トンテンカン、トンテンカン」と鉄を打つ音を響かせていたことでしょう。

2. 大変だった職人の修業

当時は技術を身体で覚えるものともいわれ、職人をめざす人は、小学校をでて間もなく（12、3才ぐらい）親方（父親など）から「鉄は熱いうちに打て」とばかりに厳しく仕込まれました。見習い中は、日の出前から鍛冶場の火をおこすための炭割り作業から始まり、重さ4キログラムほどもある大槌を一日中ふりあげていなければなりません。

鍛冶の仕事はまず、加熱した鉄を打ち延ばして刃物の形をつくります。そこに刃金をつけます。そして熱い刃金を急に冷やして硬くする焼入れをしたり、研いだりして仕上げをします。この二つのことが一通りこなせるようになるまで、6、7年はかかりました。

3. 職人をささえた神信心

熱い鉄をあつかう危険と隣り合わせの仕事でしたので、仕事場には守り神を祀って安全を祈願していました。



ファイゴ（上）と大槌（下）

深大寺地区の鍛冶屋では、正月には仕事場にシメ縄を張り、仕事始めに鍬や鎌の刃、包丁などのミニチュアを初打ちして供えました。

昭和初期までは、毎年12月になると「フィゴ祭り」といって、空気を送り炭火の火力を高めるフィゴにミカンを供えました。火をあつかう鍛冶屋にとって、ミカンは太陽の復活を願う火祭りにちなむ色なので大切にされました。祭りでは、ミカンをたくさん用意して、近隣の子供たちにも投げ与えました。

また仕事場は神聖な場所と考えられ、ワラ草履をはくべきところ、リヤカーのタイヤゴムの底に貼った草履で入ってしまい、親方から「タイヤは汚れた地面につくものだから」といってとても叱られたそうです。

4. 職人魂を現代に

昭和30年ごろまで、市内で続けられてきた鍛冶の仕事では、熟練の職人でも鍬の刃一丁を仕上げるのに丸一日かかりました。このような手間暇かけて作られた製品には、職人の誇りが込められていました。

しかし、古くから伝えられてきた鍛冶屋の仕事も、昭和初期から工場で西洋鋼を使った安価な製品が量産されるようになると下火になりました。

「しばしも休まず槌うつ響き」と歌われた童謡（村の鍛冶屋）の世界は過去のものになってしまいましたが、近年、ふたたび職人の長年の経験から得られた技や、精根こめた手作りのモノのよさが見直されています。

参考文献：『調布市百年史』・柳田国男『日本の祭』

刊行物番号

2021-125

図書館だより 第260号

令和3年9月25日発行 [市内印刷]

発行 調布市立図書館

〒182-0026 東京都調布市小島町2-33-1

TEL 042-441-6181

<http://www.lib.city.chofu.tokyo.jp/>